

AIにQAの視点を授け、 組織の品質を底上げする「仕組み」 構築の試行錯誤

株式会社本田技術研究所

SDV研究開発センター SDV商品サービス開発室 デジタルラボ 内製SW開発Gr.

遠野 柚香

AIにQAの視点を授け、 組織の品質を底上げする「仕組み」 構築の試行錯誤

AI活用は一筋縄ではいきませんでした
うまくいかなかったことも正直に話します

株式会社本田技術研究所

SDV研究開発センター SDV商品サービス開発室

デジタルラボ 内製SW開発Gr.

遠野 柚香

2023年4月より本田技研工業へ中途入社

QAとしての業務歴は10年ほど

バイク向けコンパニオンアプリ『Honda RoadSync』、
運転技術リアルタイム採点アプリ『RoadPerformance』
を担当





Honda独自アセット + 先進IT・デジタル技術を活用した顧客価値・アイデアを高速で検証し新規サービスを創出

デジタルラボのアプリ

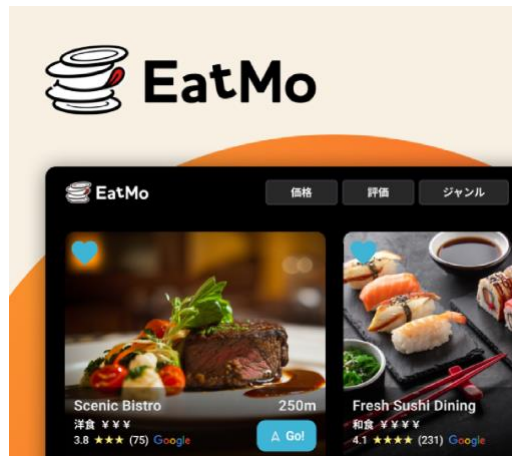


RoadPerformance

Android / iOS

スマートフォンの利便性を生かして、さらに移動をより楽しくする体験を提供

※トライアル版として提供中



EatMo

Android Automotive OS / Apple CarPlay

車両情報や外部コンテンツを活用した移動体験を提供



with Emile for iOS

iOS

AIキャラクターとの会話や走行データで、ドライブを新しいエンタメにする体験を提供

※トライアル版として提供中

内製SW開発Gr.

- 内製で高速な価値検証, 開発を担当
- マトリクス型組織
- QAはひとり
- 専任のQAがないチームも多い

	Team A	Team B	Team C
PO/PdM	●	●	●
ビジネス企画	●	●	●
UI/UX	●	●	●
アプリ開発	●	●	●
バックエンド開発	●	●	●
QA	●		

話したいこと

01

目的

1人QAに閉じたノウハウを組織へ展開すること

02

具体的なAI活用例

①分析&ドキュメント化 ②開発フローへ組み込み

03

運用後の効果測定

評価をしようとしたがデータが取れなかった

04

経験からわかったこと（まとめ）

AIを活用するときは事前設計が必要

— 01 目的

取り組みの目的

AIでQAの分身をつくり、
1人QAに閉じたノウハウを
組織へ展開すること

	Team A	Team B	Team C
PO/PdM	●	●	●
ビジネス企画	●	●	●
UI/UX	●	●	●
アプリ開発	●	●	●
バックエンド開発	●	●	●
QA	○		

AIを活用したQA分身作戦

- ①分析・ドキュメント化に活用：QAノウハウの言語化のため
- ②開発フローへの組み込みに活用：ノウハウを使い、再現するため
スキルをプロダクトへ入れることで、ノウハウを組織へ広げようとした



話したいこと

01

目的

1人QAに閉じたノウハウを組織へ展開すること

02

具体的なAI活用例

①分析&ドキュメント化 ②開発フローへ組み込み

03

運用後の効果測定

評価をしようとしたがデータが取れなかった

04

経験からわかったこと（まとめ）

AIを活用するときは事前設計が必要

— 02 具体的なAI活用例

STEP①：分析&ドキュメント化

テストケースを分析して、**テスト観点リスト**を作成

IN テストケース

No	観点(目的)	条件	条件	手順	期待結果
1	表示確認	全体		表示確認	崩れない
2		時計		表示確認	HH:MM:SS表示
3	遷移	閉じる		閉じるをタップ	前回画面に戻る
4			オフライン	閉じるをタップ	前回画面に戻る
5	計測	開始		計測をタップ	計測が開始
6		一時停止		計測をタップ	計測が停止
7		終了		計測をタップ	完了画面を表示

- 縦の抽象度を揃えた同じフォーマットで**構造化済み**
- **自分が作成したテストケースのみ**
テストの意図が明確で扱いやすい
- テストの内容は異なるものを複数
プロダクト/OS/機能など
分析対象のバリエーションをもたせる



OUT テスト観点リスト

7. エラー・異常系ハンドリング

説明：異常時の振る舞いを確認する観点

7.1 ネットワークエラー オフライン表示など4項目

7.2 サーバーエラー 表示の区別など2項目

7.3 電源断リカバリ データ保全など2項目

因子パターン表

_____	_____
_____	_____
_____	_____
_____	_____

チェックポイント

- ☐ _____
- ☐ _____
- ☐ _____
- ☐ _____

構造を読み取り、ドキュメント化

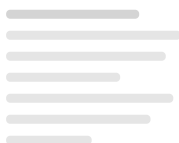
— 02 具体的なAI活用例

STEP①：分析&ドキュメント化

仕様とコメントを分析して、**PBIレビュー観点リスト**を作成

IN 仕様&レビューコメント

仕様PDF



レビューコメント

- ・「前の期間」は何を指す？
週なら先週、月なら先月？
- ・データの表示条件は？
1件でもあれば表示？
ない場合はどうする？
- ・表示/非表示の機能はつけない？
SNSに載せたい人がいるかも
つけるとしたらどこに置く？

- 書いた人や粒度が異なるものを複数セット渡す
- コメントがない、いい仕様も含む
分析対象が偏らないようにするため



OUT PBIレビュー観点リスト

1. 仕様の曖昧さ 用語や境界の解釈ゆれを確認
2. エッジケース

データ不足・同時発生・飛び値など、例外パターンで仕様が破綻しないかを確認。

チェック例

- ・データが0件／1件／上限件数の振る舞い
- ・複数条件が同時成立した場合の優先順位
- ・途中のデータが欠損している場合の処理
- ・想定外に大きい値・小さい値での挙動
- + 曖昧さの指摘など、他の観点も同様に生成

特徴や傾向を読み取ってドキュメント化

— 02 具体的なAI活用例

分析結果から観点リストができた

テスト観点リスト

テストの中身と構成を見るもの

汎用：画面遷移/データ/エラーなど
ドメイン依存：多言語/音声/デバイス連携
端末依存：OS差異/操作制限など
横断：E2Eシナリオ

テスト自体の分割観点：
一貫性/粒度の均一性/MECEなど

7. エラー・異常系ハンドリング

説明：異常時の振る舞いを確認する観点

7.1 ネットワークエラー オフライン表示など4項目

因子パターン表

_____	_____
_____	_____
_____	_____
_____	_____

チェックポイント

- ☐ _____
- ☐ _____
- ☐ _____
- ☐ _____

PBIレビュー観点リスト

仕様に書かれていないことを問うもの

仕様の明確さ
仕様の行間
エッジケース
そもそもやるべきか
PBI間の整合性
など

1. 仕様の曖昧さ 用語や境界の解釈ゆれを確認

2. エッジケース

データ不足・同時発生・飛び値など、例外パターンで仕様が破綻しないかを確認。

チェック例

- ・データが0件／1件／上限件数の振る舞い
- ・複数条件が同時成立した場合の優先順位
- + 曖昧さの指摘など、他の観点も同様に生成

— 02 具体的なAI活用例

AIを活用したQA分身作戦進捗

成果物を分析することで、QAのノウハウを観点リストという形にできた

分析&ドキュメント化への活用は手応えあり



STEP②：開発フロー組み込み

レビューアースキル化してIssue登録時とPR作成時に起動
観点リストを参照してレビューし、結果をGitHubへコメントへ残す
コメントをエンジニア(人間)が確認して次のフローへ進む



— 02 具体的なAI活用例

レビューアースキルとして開発フローで動いた

1行1観点の表でレポート
Issue/PRに変更があれば
再レビューし、同様に表
形式で結果をコメント

レビュー自体はされてい
るように見えた



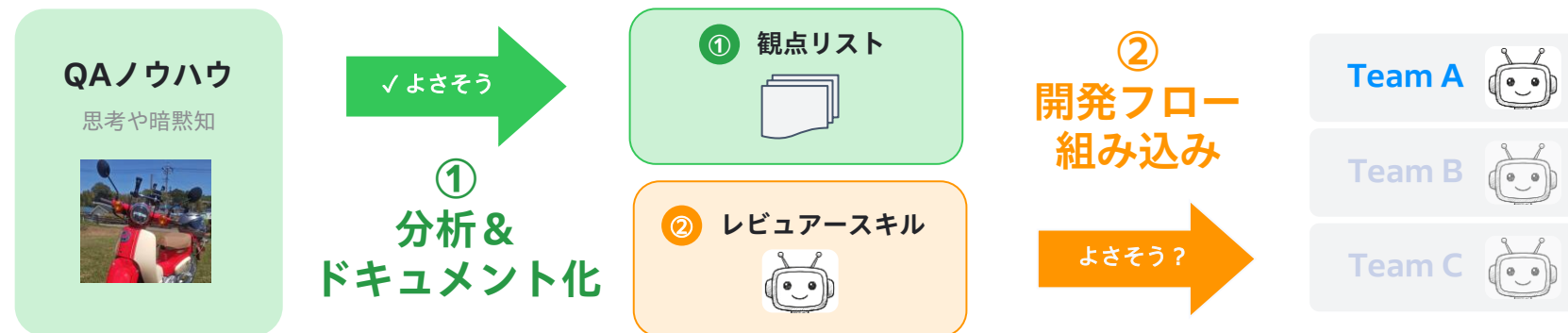
QA観点レビュー

#	観点	判定	理由・詳細
1	仕様の明確さ	OK	マッピングが表で定義されている
2	エッジケース	要確認	引数なし時の挙動が未記述
3	情報設計 (IA)	N/A	内部スキル改修、UIへの影響なし
4	依存設計との整合性	要確認	現行 SKILL.md との名称揃えが必要
5	将来の拡張性	OK	フェーズ追加もテーブル拡張で対応可
6	ユーザーの制御性	OK	引数なしで既存挙動維持（後方互換性あり）

— 02 具体的なAI活用例

AIを活用したQA分身作戦進捗

運用結果からフィードバックを得て、
観点・スキルをブラッシュアップしながらの展開を考えていたため
運用後の効果を評価する必要がある



話したいこと

01

目的

1人QAに閉じたノウハウを組織へ展開すること

02

具体的なAI活用例

①分析&ドキュメント化 ②開発フロー組み込み

03

運用後の効果測定

評価をしようとしたがデータが取れなかった

04

経験からわかったこと（まとめ）

AIを活用するときは事前設計が必要

運用後の効果は？

そもそも効果指標を設定していなかった

指標がないと、
このレビューアースキルの”いい”ところも
”よくない”ところも**わからない**

直していいか客観的に判断できない

— 03 運用後の効果測定

データ収集をすることに

直すべきポイントを客観的に評価するために
データを取ることにした

観点リストが上手く働いているかを
見たかったため、観点ごとの**指摘件数とその内容**を集計

— 03 運用後の効果測定

データ集計対象

稼働実績があるプロダクトAを対象にしてデータを集計

Team プロダクトA

期間 約 60 日間

スプリント 1週間 × 8スプリント

開発者 4 名

合計起動回数：235回

PBI(Issue)レビュー

平均：1.85回

対象97件 / 起動179回

PRレビュー

平均：1.51回

対象37件 / 起動56回

— 03 運用後の効果測定

データ集計方法：件数

レビュー結果コメントの表の、1行を1件として確認



QA観点レビュー

1件

#	観点	判定	理由・詳細
1	仕様の明確さ	OK	マッピングが表で定義されている
2	エッジケース	要確認	引数なし時の挙動が未記述
3	情報設計 (IA)	N/A	内部スキル改修、UIへの影響なし
4	依存設計との整合性	要確認	現行 SKILL.md との名称揃えが必要
5	将来の拡張性	OK	フェーズ追加もテーブル拡張で対応可
6	ユーザーの制御性	OK	引数なしで既存挙動維持（後方互換性あり）

1回

— 03 運用後の効果測定

観点ごとの指摘件数は？

同じ観点から判定しているはずなのに言い方が異なり、「観点ごと」が出せなかった



QA観点レビュー

#	観点	判定	理由・詳細
1	仕様の明確さ	OK	
2	エッジケース	要確認	
3	情報設計 (IA)	N/A	



QA観点レビュー

#	観点	判定	理由・詳細
1	スコープの明確さ	要確認	
2	エッジケース	N/A	
3	情報設計 (IA)	N/A	



機能要件の明確さ



ユーザーストーリーの明確さ



独立して完結する作業単位か

改善点： 観点リストを自然言語ではなく、IDなどの**数値で管理**する

— 03 運用後の効果測定

観点ごとの指摘件数は？

1行に複数の指摘がされており、正確な「件数」が出せなかった

#	観点	判定	理由・詳細
1	仕様の明確さ	要確認	以下が未定義 - 日付けの切り替わりタイミング - ○○に対する担当レビューアの規約 - AをBに戻す場合の文言
2	エッジケース	要確認	引数なし時の挙動が未記述

改善点： 同一観点から複数指摘があってもわかるよう**1件1行**のレポート形式にする

— 03 運用後の効果測定

データ集計方法：内容

指摘内容に問題がないか見るため、
1件ごとに、判定内容を3種類に分類 ※"観点ごと"が取れなかったので全体で集計

指摘あり

NG、要確認、要改善など
修正や確認が必要な内容

指摘なし

OK、PO確認済みなど
問題がない内容

判定不可

N/A、スキップなど
判定できない内容



QA観点レビュー

#	観点	判定	理由・詳細
1	仕様の明確さ	OK	マッピングが表で定義されている
2	エッジケース	要確認	引数なし時の挙動が未記述
3	情報設計 (IA)	N/A	内部スキル改修、UIへの影響なし
4	依存設計との整合性	要確認	現行 SKILL.md との名称揃えが必要
5	将来の拡張性	OK	フェーズ追加もテーブル拡張で対応可
6	ユーザーの制御性	OK	引数なしで既存挙動維持（後方互換性あり）

— 03 運用後の効果測定

指摘内容は？

ほとんどが「指摘なし」か「判定不可」となり、レポートの情報量が多かった優先度の高い情報を人間が判断しづらく、指摘を無視しやすくなってしまう



改善点： レビュースコープを明確にし、スコープと合った観点で判定する

— 03 運用後の効果測定

観点リストは上手く働いているか

観点ごとの**指摘件数とその内容**から確認しようとしたが、
正確な集計ができず、質をみることが難しいことがわかった

一方で、データを取ろうとしたことで**改善点**が見つかった

改善点： 観点リストを自然言語ではなく、IDなどの**数値で管理**する

改善点： 同一観点から複数指摘があってもわかるよう**1件1行**のレポート形式にする

改善点： レビュースコープを明確にし、スコープと合った観点で判定する

運用後の効果は？

効果測定の結果として、
ブラッシュアップすべきところがありすぎることがわかった

- そもそも効果測定指標を設定する
- 集計しづらさの解消

※継続的にデータを測れるよう自動化

**これらの改善は後手になるとつらい
事前の期待値設定とフロー設計が重要！**

話したいこと

01

目的

1人QAに閉じたノウハウを組織へ展開すること

02

具体的なAI活用例

①分析&ドキュメント化 ②開発フローへの組み込み

03

運用後の効果測定

評価をしようとしたがデータが取れなかった

04

経験からわかったこと（まとめ）

AIを活用するときは事前設計が必要

— 04 経験からわかったこと

AIでQAノウハウの横展開を目指した

AIでQAの分身をつくり、
1人QAに閉じたノウハウを
組織へ展開すること

	Team A	Team B	Team C
PO/PdM	●	●	●
ビジネス企画	●	●	●
UI/UX	●	●	●
アプリ開発	●	●	●
バックエンド開発	●	●	●
QA	○		

— 04 経験からわかったこと

AIを活用したQA分身作戦は、一筋縄ではいかなかった

分析&ドキュメント化での活用は上手くいったが、
開発フローで動かしてみたところ効果が測れず、
多くの**改善点**が見つかった



— 04 経験からわかったこと

学んだこと

分析&ドキュメント化への活用は手応えあり

継続運用するためには効果測定が後手になるとつらい
事前の期待値設定とフロー設計が重要！

AIを活用するときは、ぜひ思い出してみてください

参考文献

- ISTQB 用語集/ https://glossary.istqb.org/ja_JP/home
- 『ソフトウェアテスト徹底指南書』/井芹洋輝/技術評論社/2025
- 『生成AIアプリケーション評価入門』/松木晋祐/技術評論社/2026

HONDA
The Power of Dreams

How we move you.
CREATE ► TRANSCEND, AUGMENT